私の戦争体験　日本の戦争とその後の生活　　堤信一

始めに

私は昭和４年（1929 年）生れの男５人と女３人の８人の二番目です。東京品川区に住んでいましたが、強制疎開の対象になり軍都とは知らず千葉に来た。千葉神社の近くの道場北町隣は「来迎寺」（らいごうじ）というお寺であった。

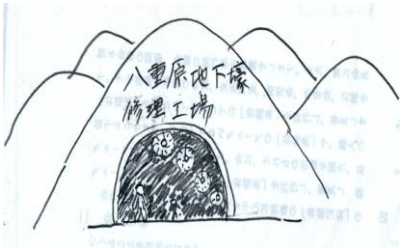
満州事変から日中戦争へと 15 年戦争、日独伊の枢軸同盟を結び。初期には中国主要都市を占領し又南方の南方諸国シンガポールや仏領印度支那（フツリョウインドシナ）・フィリッピン・マレー半島等を占領、これは仏蘭西（フランス）やオランダ等が独逸（ドイツ）に本国を占領され植民地まで手が回らなかったので、日本が占領出来た。又真珠湾に不意打ち特攻作戦で大成果を上げ提灯行列や旗行列と勝利に酔いしれていた。

当時私は全くの軍国少年で、天皇陛下の為に死ぬ事は最高の名誉と思い、「予科練」を志願しようと思っていた。伯父は「信一よく聞け、お前は予科練へ行きたいそうだが、兵隊さんが死に際して『天皇陛下万歳』というのはうそで、皆死ぬ時は『お母さん！』と言って逝くんだ。お前の一番大事な人はお母さんだ」と言って止めさせようとした。私は反発したが、「寸足らず」で実現出来なかった。私の時代は小学校一年から「ススメ　ススメ　ヘイタイススメ」「木口小平（きぐちこへい）は死んでもラッパを離しませんでした」とか、修身や教育勅語の教育の中で作られてしまっていた。

勤労動員

東京都高輪工業学校から千葉工業学校へ転校した私は、三年になった９月から勤労動員で、木更津の第二海軍航空廠に動員され周西(現在の君津市)の八重原工場に配属。級友７～8 人一室の寮生活になった。仕事は」「銀河」という飛行機エンジン「誉（ほまれ）」の整備・修理の仕事であった。

この頃には、ミッドウェー海戦の手痛い敗北で航空母艦や戦艦を失い、数百機の飛行機そして制海権・制空権も失い米軍の空襲で仕事が出来ず、次に行った所は佐貫山中の地下工場であった。山をくり抜いたトンネルで縦横 4～5m で長さは 100m～200m、床にはコンクリートが敷かれ、天井にはエンジンを吊り上げるクレーンがあった、このトンネル工場は昭和 17 年から朝鮮人を何百人も使い突貫工事で敗戦の日まで続け、全長 5km もあったそうだ。



1945 年７月７日千葉大空襲　(七夕空襲)

午後７時頃、家に帰り銭湯に行ってから食事をし、10 時床について間もなく警戒警報。甲府が B29 の攻撃と伝へられると間もなく千葉市が空襲、始めは市の外周をおそい、市の中心部を焼き尽くす焦土作戦であった。

幼児は両親が他の兄弟姉妹は防空頭巾に、蒲団をかぶり「院内国民学校の裏の田圃に逃げろ」という父親の指示で、兄は手早く防空壕の入口に土をかけ一緒に逃げた。周囲の家々も、もえはじめ猛火の中を防空頭巾に蒲団をかぶって逃げた。皆バラバラになりましたが夜明前には全員落ち合う事ができた。夜が明けて一面が焼野原、案外近くに県庁の建物が見えた。我が家の焼け跡に戻ると一面焼け野原で境界も何も判らなかった。庭にあっ

た、水まき用の石柱と防空壕の位置から我が家の位置が判った。一人一個のおにぎりの差し入れがあったそうだが全く記憶にない。午後になると、黒焦げの焼死体が、お寺さんの前に 20 体位並べられていた、それを兵隊が農具のような物でトラックに積み込んで行った。どこの誰ともわからず合葬されてしまうのだろうか。

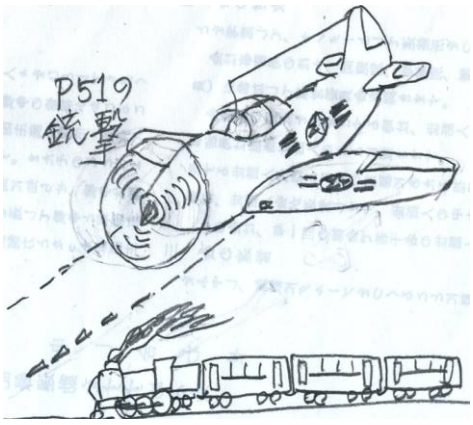
今晩からどこに宿るか隣組の連絡で、行場のない乳幼児をかかえた母親は料亭「牧の家」で収容する。亥鼻山の下の森に囲まれた、焼けなかった料亭である。この連絡で、母と幼児は「牧の家」にお世話になり、3 日目には軍人が泊まると追い出された。そして東京で焼け残った姉の所に幼児をつれて、厄介になった。父と兄弟 5 人は焼けなかった防空壕に、泊まる事になった。

防空壕生活とバラック生活・そして敗戦

防空壕生活は二週間位だろうか、幅 1.5m位背を大きく曲げなければ奥へ入れない位の奥行 3m のもので、5 人もの人が住めるようなものでない、夜露をしのぐだけのものだった。

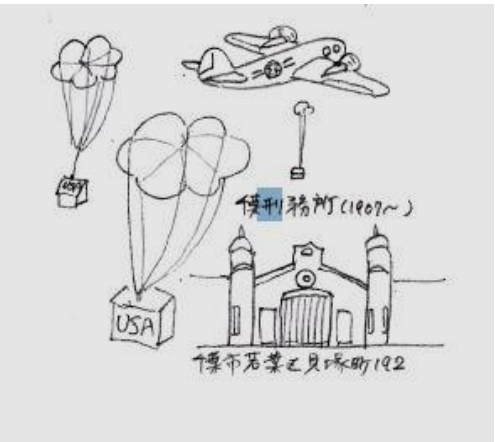
そこへ焼けぼっ杭をわたして、腰かけて寝るのです。三日目には豪雨があり、水が下からしみだして 5cm も水位が上昇した。皆くるぶしを水につけたまま、一晩過ごした。

そのうちに周りの住民もバラックを建て始め、我家でもバラックを何とかしようと、焼けた柱や、焼けトタンを集め何とか 6 畳と 4.5 畳位のバラックを建てる事が出来た。バラックを建て、1 ヶ月位すると母は姉の所から幼児を連れて、帰って来た。バラックは畳などなく筵（むしろ）を敷いたものだった。とにかく大変だったのは食事でした。配給米は、遅欠配が有り米の替りに大豆の粉だったりした。



話が変わりますが、空襲から焼け跡かたづけをしている内 3 日目には地下工場への出勤命令がきた。次の日から又汽車に乗って出勤した。巌根（イワネ）駅をすぎた時又汽車を狙った、カーチス P51 の銃撃である。汽車は木更津山中のトンネルに逃げこんだが、数人の重軽傷者をだした。一人は大腿部貫通の重傷者だった。佐貫山中の地下工場に着くと、私達を集めて訓示である。私は千葉空襲で家を焼かれ、大変だった位のお見舞いの言葉あると思ったら、とんでもない。「戦局益々急。米軍がやがて館山湾に上陸する。その時お前達は、これをつけて、タコ壷を掘り米戦車と共に自爆するのだ」との話だった。布切れのヒラヒラは菊水部隊の胸章だった。私は兵隊でもないのにと思ったがこれも運命かと思った。

それから 20 日近く経った 8 月 15 日、「本日 12 時より重大放送があるから全員集合」との命令だった。職場の全員が集まると放送が始まった、雑音がひどくよく聞き取れないが「戦争に負けた」事だけはわかった。皆呆然自失だった、そして軍人と職員だけは、「次の指示を待て。」学生は「今日で任務は終る。直ちに学校に戻れ。」との事だった。私は、その時 16 歳であった。



こんな事もあった！刑務所に救援物質投下！

戦後まだ正式に進駐軍が各地に派遣される前だと思うが(9 月 10 日頃か)、千葉市貝塚町にある刑務所の米軍捕虜に向けた救援物資と思われるものが落下傘で落とされたが、風向きによって刑務所より 500 メートルほど西に離れた院内国民学校よりに着地した。それを聞いた人達がかけつけると中味は、たばこ、石けん、チョコレート等だった。その話が一部に伝わり、私も兄と一緒にかけつけた。一包みを頂戴して家に持ち帰ると、キャラメルやラッキーストライク（タバコ)、チョコレート、石けん、練り歯磨等だった、この一包みは先にみつけた人が他の物を持ちかえり、一部を葦の葉陰にかくしてあった物らしい。あけてびっくりである、よだれのでる程ほしいものばかり。日本では何年もお目にかかっていない物ばかり、良い香りの化粧石ケン。何か一人占めは、気恥ずかしいが、たっぷり文化の恩恵に浴させもらった。この事は新聞種にもならなかったが公的記録にある筈だ。恩恵に浴した人は刑務所をはじめ相当数いる筈である。

戦後の生活

敗戦ですべての物を失った、貯金は凍結され、国債は紙切れ同然、新円が発行され今迄の円は、きり換えられた。

物価は考えられないスピードで釣り上げられ国民は一部の人を除いて裸にされたのである。国の責任政府の責任は、皆国民の背に負わされたが我家では家族 10 人が何としても生き抜かねばならいと両親と兄は決意したと思う。家には戦時中、将来工場をやる時にと、コープレといわれる真鍮板やアルミ板(50 ㎝×1.5ｍ位)が数 10 枚疎開してあった。父と兄は道具を手に入れ、組み立て式の弁当箱や「おろし金､」「お玉」などを作り、これを母が農家へ行って米や麦と交換した。農家の人にも評判がよく喜ばれた。前に工場を経営した技術であった。闇市でも母が販売し一時期を過ごした。材料を使い果たすと、進駐軍のケチャップの空き缶等を集めておろし金を作った。しかし、他の企業でも一斉に家庭用品を作り始め立ちゆかず。次に闇市で「おでん屋」を始めた、昔東京で好まれた味噌おでんだ。これもよく売れ又戦争中海産物を採れなかった為か平貝という、楕円形の直径(長い方)10 ㎝もの貝柱の味噌おでんが喜ばれた。こうして 1～2 年を過ごし、そして本業に戻り照明器具製造の道に入った。

兄は両親が闇市（ヤミイチ）で商売をしている間、千葉と北海道や青森を往復し往き帰りで、北へは南京豆、千葉へは北海の産物を持込んで商売をした、私達家族の生活の為に

貢献した。

しかし、数年の間フスマのパンやドニク餅といわれる豚のエサで飢えをしのいだ事は忘れられない思い出である。

私も敗戦の翌年千葉県立千葉工業学校を卒業し、学校の推薦で穴川にある(株)内外製鋼所に就職した。やがて妹も市役所に就職した。皆、次々に働くようになり、昭和 27 年（1952 年）バラックではなしに新しい家を新築する事が出来た。バラックでは、昭和 25 年(1950 年)の大雪(積雪 40 ㎝)でつぶされそうになった事もあった。家の新築で一つの時代がすぎた思いだった。

私が(株)内外製鋼所に入社した翌年には労働組合も生まれた。加盟した組合は、産別会議全日本機器労働組合（全日本産業別労働組合会議）である。そしてその年（1945 年）は戦後はじめて宮城前広場にメーデーが行われた全員が参加した東京では 50 万人の人がメーデーを祝った。千葉では県庁広場に 1 万人がつめかけた。

スローガンは

① 働けるだけの飯をくわせろ！

② 民主的人民革命政府を！

③ 賃金は家族給を含む生活給を！

1946 年(昭和 21 年)5 月 18 日プラカード事件

1946 年(昭和 21 年)5 月 18 日には食糧メーデーと稱し、宮城前広場に何万人という労働者だけでなく主婦や復員者、失業者等が宮城内に入った。プラカードには

「朕（チン）はタラフク食っているぞナンジ人民飢えて死ね」(wikipedia 写真)

これは物議をかもしたが、国民の戦争責任を問う反映でもあったのだろうか。そして NHK が「聞け万国の労働者」とか、「世界をつなげ花の輪に」をラジオで放送し働く人たちを激励したのである。

今私の一家は、両親は、父は昭和 62 年（1987 年）に 91 歳で、母は平成 3 年（1991 年）に 90 歳でそれぞれ亡くなったが、兄弟姉妹は 8 人共健在で夫々の配偶者も含めて、年に 1 回一泊して当時の色々な事を話しあう場を設けている。兄は 91 歳、私は 88 歳、末弟は 67 歳で、8 人の兄弟妹は夫々日本の戦後をまじめに生き抜いてきた。年に一度でも全員で話し合えるのは両親の健康長寿の遺伝子もあり、幸運もあろうか、あの悲惨な戦時を生き抜き平和憲法を守りぬいてきた結果とも考えている。今後共平和裡に生き抜きたいと考えている。

（編集　関　康治・伊藤章夫）